

8.1 The Tangent Space at a Point

佐野博亮

2024 年 9 月 10 日

多様体 M の点 p が与えられたとする。 p の近傍から \mathbb{R} への C^∞ 関数について、定義域と関数の組の 2 項関係を次で定める。

$(f, U), (g, V)$ に対して、

$$f \sim g \iff \exists W \in \mathcal{O}; W \subset (U \cap V), p \in W \text{ s.t. } f|_W = g|_W$$

これは同値関係である。この同値関係に関する同値類を多様体 M の点 p における C^∞ 関数の芽と言う。点 p における C^∞ 関数の芽全体の集合を $C_p^\infty(M)$ と書く。

$C_p^\infty(M)$ は、写像の和と積および実数倍をもって \mathbb{R} 上の代数をなす。

ここでは、和について well-defined であることを示す。

$(f_1, U_1) \sim (f_2, U_2)$, $(g_1, V_1) \sim (g_2, V_2)$ とする。関数の和は次のように定義される。

$$f_1 + g_1: (U_1 \cap V_1) \longrightarrow \mathbb{R}; q \mapsto (f_1(q) + g_1(q))$$

$$f_2 + g_2: (U_2 \cap V_2) \longrightarrow \mathbb{R}; q \mapsto (f_2(q) + g_2(q))$$

ここで、 p の開近傍 $U \subset (U_1 \cap U_2)$, $V \subset (V_1 \cap V_2)$ が存在し、 $f_1|_U = f_2|_U$, $g_1|_V = g_2|_V$ が成り立つ。よって、 p の開近傍 $W = U \cap V$ を定めると、

$$\forall q \in W; (f_1 + g_1)(q) = f_1(q) + g_1(q) = f_2(q) + g_2(q) = (f_2 + g_2)(q)$$

すなわち $(f_1 + g_1) \sim (f_2 + g_2)$ が成り立つ。 ■

接空間

$C_p^\infty(M)$ は \mathbb{R} 代数であるから、もちろん \mathbb{R} 線形空間である。

導分

多様体 M の点 p が与えられたとする。 \mathbb{R} 線形写像 $D: C_p^\infty(M) \rightarrow \mathbb{R}$ で、Leibniz 則を満たすものを点 p における導分と言う。

$$D(fg) = D(f)g(p) + f(p)D(g)$$

well-defined であることは、 $(f, U) \sim (g, V)$ のとき $f(p) = g(p)$ であることから従う。

接空間

導分は \mathbb{R} 線形写像であるから、導分全体の集合は \mathbb{R} 線形空間をなす。

接空間

多様体 M の点 p が与えられたとする。点 p における導分を点 p における接ベクトルと言う。点 p における接ベクトル全体のなす線形空間を点 p における接空間と言ひ、 $T_p(M)$ あるいは T_pM と書く。

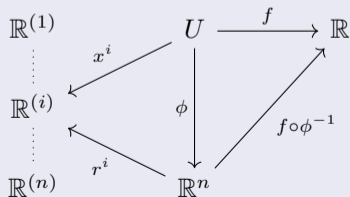
多様体 M の点 p の開近傍 U に対して、 $C_p^\infty(U) = C_p^\infty(M)$ であるから $T_p(U) = T_p(M)$ が成り立つ。

偏微分

偏微分

n 次元多様体 M の点 p における座標近傍 $(U, \phi) = (U, x^1, \dots, x^n)$ が与えられたとする。 \mathbb{R}^n の標準座標を r^1, \dots, r^n とすると、 $x^i = r^i \circ \phi$ である。 p の近傍から \mathbb{R} への C^∞ 関数 f の偏微分は次のように定義される。

$$\frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p f := \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} (f \circ \phi^{-1})$$



偏微分

偏微分 $\frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p$ は点 p における接ベクトルである。

以下を示せば良い。

- Well-defined であること
- 線形写像であること
- Leibniz 則を満たすこと

偏微分

証明

まず、偏微分が $C_p^\infty(M)$ から \mathbb{R} への写像として well-defined であることを示す。

$(f, U) \sim (g, V)$ とする。 p の開近傍 $W \subset (U \cap V)$ が存在し、 $f|_W = g|_W$ が成り立つ。 よって

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} (f \circ \phi^{-1})|_{\phi(W)} &= \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} \left(f|_W \circ \phi|_W^{-1} \right) \\ &= \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} \left(g|_W \circ \phi|_W^{-1} \right) = \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} (g \circ \phi^{-1})|_{\phi(W)} \end{aligned}$$

実関数の偏微分は定義域を制限しても変わらないから、

$$\frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} (f \circ \phi^{-1}) = \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} (g \circ \phi^{-1}) \quad \therefore \frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p f = \frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p g$$

偏微分

証明

次に、線形写像であることを示す。実数倍について

$f \in C_p^\infty(M)$, $a \in \mathbb{R}$ とする。 $\forall q \in \phi(U)$ に対し、

$$\begin{aligned} ((af) \circ \phi^{-1})(q) &= (af)(\phi^{-1}(q)) = af(\phi^{-1}(q)) \\ &= a(f \circ \phi^{-1})(q) = (a(f \circ \phi^{-1}))(q) \end{aligned}$$

より、 $(af) \circ \phi^{-1} = a(f \circ \phi^{-1})$ が成り立つ。したがって、

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p (af) &= \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_p ((af) \circ \phi^{-1}) = \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} (a(f \circ \phi^{-1})) \\ &= a \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} (f \circ \phi^{-1}) = a \frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p f \end{aligned}$$

偏微分

証明

和について

$f, g \in C_p^\infty(M)$ とする。 $\forall q \in \phi(U)$ に対し、

$$\begin{aligned} ((f + g) \circ \phi^{-1})(q) &= (f + g)(\phi^{-1}(q)) = f(\phi^{-1}(q)) + g(\phi^{-1}(q)) \\ &= (f \circ \phi^{-1})(q) + (g \circ \phi^{-1})(q) = ((f \circ \phi^{-1}) + (g \circ \phi^{-1}))(q) \end{aligned}$$

より、 $(f + g) \circ \phi^{-1} = (f \circ \phi^{-1}) + (g \circ \phi^{-1})$ が成り立つ。したがって、

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p (f + g) &= \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_p ((f + g) \circ \phi^{-1}) = \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} ((f \circ \phi^{-1}) + (g \circ \phi^{-1})) \\ &= \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_{\phi(p)} (f \circ \phi^{-1}) + \frac{\partial}{\partial r^i} \Big|_p (g \circ \phi^{-1}) = \frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p f + \frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p g \end{aligned}$$

偏微分

証明

最後に、Leibniz 則を示す。

$f, g \in C_p^\infty(M)$ とする。 $\forall q \in \phi(U)$ に対し、

$$\begin{aligned} ((fg) \circ \phi^{-1})(q) &= (fg)(\phi^{-1}(q)) = f(\phi^{-1}(q))g(\phi^{-1}(q)) \\ &= (f \circ \phi^{-1})(q)(g \circ \phi^{-1})(q) = ((f \circ \phi^{-1})(g \circ \phi^{-1}))(q) \end{aligned}$$

より、 $(fg) \circ \phi^{-1} = (f \circ \phi^{-1})(g \circ \phi^{-1})$ が成り立つ。したがって、

$$\begin{aligned} \left. \frac{\partial}{\partial x^i} \right|_p (fg) &= \left. \frac{\partial}{\partial r^i} \right|_{\phi(p)} ((fg) \circ \phi^{-1}) = \left. \frac{\partial}{\partial r^i} \right|_{\phi(p)} ((f \circ \phi^{-1})(g \circ \phi^{-1})) \\ &= \left\{ \left. \frac{\partial}{\partial r^i} \right|_{\phi(p)} (f \circ \phi^{-1}) \right\} g(p) + f(p) \left\{ \left. \frac{\partial}{\partial r^i} \right|_{\phi(p)} (g \circ \phi^{-1}) \right\} = \left\{ \left. \frac{\partial}{\partial x^i} \right|_p f \right\} g(p) + f(p) \left\{ \left. \frac{\partial}{\partial x^i} \right|_p g \right\} \end{aligned}$$

以上より、偏微分が点 p における接ベクトルであることが示された。

表記法

1次元多様体においては、 $\frac{\partial}{\partial x} \Big|_p$ を $\frac{d}{dx} \Big|_p$ と書くことがある。

点が明らかな場合は、 $\frac{\partial}{\partial x} \Big|_p$ を $\frac{\partial}{\partial x}$ と書くことがある。